

モンゴル国現代史のなかで継承され変化した フェルトの生産技術と製品

風戸真理

モンゴル国では、住宅部品や伝統雑貨、そして観光みやげとして羊毛フェルト製品が生産されている。住宅部品というのは移动式住居「ゲル」の壁や天井などにあたるものであり、モンゴル国では現在も多くの人びとがゲルに住んで遊動的な牧畜を営んでいる。とはいえモンゴルは、13世紀以来の帝国の歴史を有し、現代史においては、20世紀初頭に社会主義革命を、20世紀末に民主化・市場経済化への体制転換を経験している。本稿では、モンゴル国のフェルト生産の技術と製品をめぐり、国家の体制や市場の変化のもとで、何がどのように変わり、何が受け継がれてきたのかを検討する。

モンゴルのフェルト生産技術

モンゴルでは、紀元前後からフェルトが作られてきた。モンゴルのフェルト生産技術は大きく二つに分けられる。一つは、遊牧民による長い歴史をもつフェルト生産技術である「伝統的技術」(traditional felting)である。二つめは、1930年代から工場生産の技術として始まった「機械的技術」(mechanical felting)である。

伝統的技術の手順を簡単に述べると、まず羊毛をほぐし(写真1)、型となるフェルトや布の上に均等な厚さに並べ、その上から水をかける。それから、型布で全体をのり巻きのように巻き取り、これを家畜に引かせて転がし、摩擦と振動をかけて羊毛に縮絨という変化をおこさせるものである。これは一般にウェット・フェルティング(wet felting)とよばれる技術である。

もう一方の機械的技術は、縮絨の原理は伝統的技術と同じウェット・フェルティングではあるが、毛

をほぐすのに人力でなく風圧をかける機械を、羊毛に摩擦と振動をかけるのに畜力でなく動力機械を使うところが異なる。加えて、機械的技術には近年「針で刺す技術」(shivurin felting)とよばれるニードルパンチ製法も加わっている。

モンゴルのフェルト製品

モンゴルのフェルト製品には、昔から牧民が生産し、使ってきたいわゆる「伝統的な製品」と、2000年以降にとくに増えている外国人観光客向けのみやげものとしての「フェルト小物」の二つがある。

「伝統的な製品」はさらに二つに分けられる。一つめは住宅部品、すなわちゲルの壁や天井として使われる巨大なフェルトである。その標準的な寸法は国家規格(GNS 0296:2012)によって「長さ5m×幅1.8m×厚さ12mm」と定められている。本稿ではこれを「壁フェルト」とよぶ。二つめは「伝統雑貨」である。これには、厳冬期の厚手の長靴「フェルト靴」(写真2)をはじめ、荷駄用家畜(ウマ・ウシ・ラクダ)の鞍褥、塩を入れる提げ筒、フェルトを狐型に切り抜いた乳児用のお守り、などが含まれる。現在、壁フェルトとフェルト靴とともに、伝統的技術と機械的技術の両方によって生産されている。

「フェルト小物」はバリエーションが多く、新商品も次々と出るが、2015年現在の主な定番商品は次の四つに分けられる。すなわち、バックや帽子・室内履き(写真3)などの縫い目のない服飾雑貨、モンゴルの五畜(ウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダ)などを象ったぬいぐるみ(写真4)、鍋敷きや壁飾りなどのインテリア雑貨、そして小型フェルト作品に金具をつけたキーホルダーである。フェルト



1. フェルト生産の伝統的技術の1プロセス。羊毛をほぐす作業

小物はハンドメイドを売りにしており、フェルト本体を手作業によるウェット・フェルティング技術で作ったり、縫製を手縫いで行ったりしている。

フェルト生産と国家の政策

ここで、フェルトの長い歴史と国家との関係をふり返ってみよう。13世紀のモンゴル帝国期から、ほとんどの家族がフェルト生産に従事し、フェルトは各家族の自給用のほか、交易や納税の手段として国家の流通・統治システムに埋め込まれていた。

20世紀になるとモンゴルは社会主義的な近代化・工業化の時代に入った。とくに1930年代には、壁フェルトとフェルト靴が国家の主要な工業製品として増産された。それまでフェルト製品は牧民が伝統的技術を用いて生産するものであったが、この時代に、工場で機械的技術によって生産されるものに変わっていった。とくに、1950年代からはすべての羊毛が牧畜協同組合によって買い上げられて、首都ウランバートルの工場で加工されるようになり、牧民によるフェルト生産は行われなくなった。

1990年代初頭、モンゴルの国家体制が転換した。これにともない国営のフェルト工場の稼働が止まり、フェルト製品の生産が激減した。そこで牧民は生活必需品である壁フェルトとフェルト靴を自作し始めた。しかしながら、40年前の記憶を辿りながらの試行錯誤の過程では、壁フェルトに穴が空いてしまうなどの失敗もあったという。

そして2000年代になると、先述したとおり、観光業の発達にもなつて、外国人観光客向けの「小物フェルト」の生産が増加した。

伝統と現代・変化と継承

これまでに、「壁フェルト」「伝統雑貨」「小物フェルト」という3種類のフェルト製品について述べてきたが、これらの差異と共通点はなんだろうか。

労働力の面では、伝統雑貨と小物フェルトは自宅において1人で作られることが多いが、壁フェルト生産では一時的に多くの労働力と畜力が必要になるため、協業が組織され、共食などをともなう。材料については、壁フェルトと伝統雑貨を自家用に生産

する牧民は、自家製の羊毛を使う。しかし、小物フェルトの生産者は、たとえ本人がヒツジを飼育していても、工場で精製・染色された羊毛を買い、毛質を追求する時にはオーストラリア産のメリノ品種の羊毛を買って使うこともある。

次に、伝統的な製品（壁フェルト）「伝統雑貨」とおみやげ用の「小物フェルト」では何が変わり、何が継承されているのかを検討しよう。変化のなかでもっとも大きなものは使い手の変化であろう。伝統的な製品である壁フェルトとフェルト靴は、旧ソ連などに輸出されると同時に、これをモンゴルの人びとも使っていた。しかし、小物フェルトは外国人に販売するために企画・デザイン・生産されており、モンゴル人はほとんど使わない。

他方で、小物フェルトには伝統雑貨の技術を継承している側面がある。というのは、モンゴルの小物生産者にもっとも人気にある商品は室内履きなのであるが、これは伝統雑貨の「フェルト靴」の作り方を応用したものである。モンゴルの人びとは縫い目のない立体的な履き物に親近感が強いようで、多くの生産者が室内履きを作っている。それゆえに室内履きの市場価格は総じて低めである。なお、室内履きは、小物のなかで唯一モンゴル人自身も使用する製品である。

加えて、ぬいぐるみと「壁フェルト」には意外な共通点があることを指摘したい。ぬいぐるみは平面のフェルトを裁断し、糸で縫い合わせて立体作品にしたものである。実は、ゲルの天井を覆う扇形のフェルトは、壁サイズの長方形のフェルトを作った後で、これを裁断して縫い合わせて作られている（写真5）。ぬいぐるみと壁フェルトは、平面のフェルトを作った後で、それを切って縫い合わせる点で技術的に連続しているのである。

フェルトの今後

モンゴルでは紀元前後からフェルトが作られ、中世以降には国家の統治の手段に組み込まれるほどフェルトは重要であった。社会主義期にはフェルト生産は機械化・工業化されたが、体制転換をきっかけとして伝統的技術によるフェルト生産が再びバ



2. 厳冬期用の厚手の長靴「フェルト靴」



4. モンゴルの五畜を象ったぬいぐるみ



3. フェルトの室内履き



5. ゲルの天井を覆うフェルトは、壁フェルトを裁断して縫い合わせる

ルした。伝統的なフェルト製品と現代のおみやげ小物の連続性としてとくに興味深いのは、フェルトは不織布であるのに、モンゴルではフェルトといえは「縫う」ものであるという認識が強い点である。

工業部門ではすでに「針で刺す技術」であるニードルパンチ製法が導入され、軽量タイプの壁フェルトが消費者に人気である。それに続き、小物フェルト業界にも羊毛に手で針を刺して絡める「ニードルフェルト技術」が紹介されている。しかし小物市場にはニードルフェルト技術による商品は少なく、フェルトを裁断して縫い合わせたり、裁断したもの同士を再度ウェット・フェルティング技術によってつなぎあわせた商品が多い。今後モンゴルのフェルト生産者たちが、外来の技術や外国の消費者の需要をどのように受容していくのか、見守っていききたい。

風戸真理（かざと・まり）

北星学園大学短期大学部専任講師